学級担任と通級による指導担当教員との連携を密にして、小学４年生のＡ児の学習環境を整えた事例

１．事例の概要

通常の学級に在籍する自閉的傾向のある小学４年生のＡ児が通級による指導を受けながら学習を行っている事例である。Ａ児は、学習課題に取り組もうとしても何から取り組んだらいいのかが分からないと言った様子が多くみられた。そのため、Ａ児が落ち着いて学習活動に取り組むためには、視覚的支援や明確な指示などの手がかりが必要と考え、マスの大きさを拡大したり、補助線を入れたり、朝の準備カードの作成などを行った。また、Ａ児が見通しをもって授業に取り組めるように、黒板に活動の流れを書いて説明したり、指示が届きやすいように、座席の位置を工夫したりして、Ａ児の自尊心を傷付けないように配慮した。また、生活面では身の回りの整頓が苦手なため、整理整頓がしやすいように身の回りのものを用具袋を使って整頓させるなどの工夫をした。その結果、自分のできることが増えるにつれ、自信をもって学習課題に取り組むことができるようになってきた。

キーワード　通級による指導、自閉的傾向、視覚的支援、整理整頓、興味関心、付箋、用具袋

２．児童の実態

Ａ児は、通常の学級に在籍する自閉的傾向のある小学４年生の児童で、週に一度、通級による指導を受けている。学習面では、大きな遅れはない。生活面では、自分がしなければならないことを他の児童に合わせて行うことが難しい。また、身の回りの整理整頓も苦手で、連絡帳やノートなどをすぐに失くしてしまう。友人関係では、トラブルが起こると感情が高ぶって抑えられなくなり、その度に、自分の決めた場所でクールダウンをして、気持ちが落ち着くと戻ってくるということを繰り返している。自分の興味のあることには積極的に取り組み、苦手なことにも取り組もうという気持ちはある。そのため、学習の手がかりを明らかにして意欲を高めるための工夫や、日常生活においても落ち着いて生活することができる手立てが必要である。

３．本事例に関する基礎的環境整備

○　Ｂ小学校には、通常の学級のほかに、特別支援学級や通級による指導がある。通常の学級に在籍していても、特別な支援が必要な場合は、通級による指導を受けることができる。該当児童の担任と保護者が相談をしながら、通級による指導担当教員からアドバイスをもらうことができる。【基礎１】

○　Ｂ小学校では、学年ごとに学習プリントをパソコンサーバーに保存し、ライブラリとして活用している。また、Ａ児が活用しているビジュアル教材等は、拡大コピー機やデジタルカメラ、書画カメラ等の豊富な備品整備により作成が容易にできるようになっている。【基礎４】

○　Ｂ小学校では、各学年に学年会室が設置されており、多目的に利用している。Ａ

児にとってはクールダウンのスペースとしても活用している。【基礎５】

○　Ｂ小学校では、少人数指導担当教員や、特別支援教育支援員が、必要に応じて個に応じた指導や支援をしている。また、通級による指導では、必要性が出てくると体験的入級や年度途中からの入級も可能になっている。【基礎７】

４．合意形成のプロセス

保護者は、他の児童と同じように落ち着いて学習に取り組んでほしいと考えていたが、Ａ児自身は年度当初より、学習、生活両面で困難さを感じていたため、春の家庭訪問では、担任から保護者にＡ児の困難さを伝えたところ、保護者からも生活面で気になることが話題に挙がり、専門性の高い職員等による見立ての必要性を感じていた。通級による指導担当教員が行動を観察し、通級による指導での支援の必要性を伝え、保護者との合意が図られたため、週に一時間の通級による指導を受けている。

５．合理的配慮の実際

○　Ａ児がその日、その時間に必要な用具を忘れずに持ってくることができるように、教科ごとに袋を用意し、その袋に教科名と教材をシールで貼り、ひとまとめにできるようにしている（写真）。袋に教材が書いてあるため、足りないものがあった際には、気付きやすくなる。【合理①－１－１】

写真　必要な具意識をまとめたもの

○　黒板の字をノートに写すときには、マスの中に字が入らず、整った字形で書くことができない。そこで、通常のマスを大きく拡大したワークシートを用意し、記入している。【合理①－１－２】

○　Ａ児にとって学習の妨げとならないように前面の掲示はなるべくせず、刺激を少なくするようにしている。【合理③－２】

６．本事例の成果と課題

身の回りの整頓ができなかったＡ児にとって、簡単にまとめることのできる教科ごとの袋を使うことで、物をなくすこともなくなった。また、付箋を使ってページを開きやすくすることで授業のスタートにも間に合うようになった。また、保護者と懇談を重ね支援をしていく中で、Ａ児の実態を理解し、しっかり向き合っていきたいという気持ちから、保護者が発達外来への受診を考えられるようになり、年度内に発達外来を受診することができた。

通級による指導では、自立活動の指導だけでなく精神面も支えている。家庭環境にも課題が大きく、大人に話をじっくりと聞いてもらえるということに特に喜びを感じている。そのため、通級による指導担当教員と連携を密にすることで精神面の安定を図ることができている。また、情報交換することで必要な支援が見えてくることも多く、支援しやすくなった。学校ではできることも家に帰ってからはなかなか定着させることが難しかったため、家庭との連携をさらに密にしていく必要がある。